

「結果生かせるのか、結果減ぼすのか～ 生き方によって選びを示す」

I ペテロ 1 章～2:1-25

自由人としてどうふるまうのか？

[ペテロの手紙 第一 2:16]『自由な者として、しかもその自由を悪の言い訳にせず、神のしもべとして従いなさい。』

自由とは好き勝手に振る舞いをしていいと言われていたわけではありませんでした。自分がどうして今そこに存在しているのかを考えてそこの自分の在り方を受け取ってその在り方に立って自分の意志や信念を表すということです。

「従いなさい」…主権者である王・人の立てた制度に対して

「敬いなさい」…すべての人に対して

「愛しなさい」…兄弟たちに対して

「尊びなさい」…王に対して

すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。

「自分の敵を愛しなさいと神様は言われました。」(ルカ 6:31～35) なぜならば私たちが愛し救いへと導いてくださった神様が恩知らずの悪人にも憐れみ深いからです。この世では色々と言われてしまうリーダーも様々なことを考えています。自分の基準で見えなくて従えない悪いと思ってしまうリーダーも何も考えていない、何も感じていないわけではなく、その行動に至る何か必ずあるはずなのです。神様が私たちにしてくれたように、敵を愛しその人の心の内側を知りその人のために祈りましょう。

[ルカの福音書 6:41～42]『あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分自身の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。あなた自身、自分の目にある梁が見えていないのに、兄弟に対して『兄弟、あなたの目のちりを取り除かせてください』と、どうして言えるのですか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、兄弟の目のちりがはつきり見えるようになって、取り除くことができます。』

自分の目の中の梁は自己中心です。目の梁はいつも私たちの中にあり、弱さが出た時にそれが顕著に現れて相手を傷つけてしまいます。自分の梁の価値観で見ても判断が間違っています。だから自分でその梁に気が付いていつも自分の中に間違った価値観がある可能性があるからこそ取り除かなければならないと知る必要があります。自分の中にどのような梁があるのか、しっかりと受け入れ捨てるべきものを捨てていきましょう。

脱ぎ捨てるもの

[ペテロの手紙 第一 1:23]『あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のこぼによるのです。』

[ペテロの手紙 第一 2:1,2,3]『ですからあなたがたは、すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。あなたがたは、主がいつくしみ深い方であることを、確かに味わいました。』

私たちは神様の言葉によって新しい人生を与えていますとペテロは言っています。新しく生まれた私たちはこの乳飲み子のように御言葉の乳を慕い求めるように言われています。今私たちがいる場所、家庭や学校や職場など任されているところを思い出してください。そこを悪くしてやりたいと思ってる人は一人もいないのです。でも良くしたいのに良くなっていない。人間関係が良いとは言えない。問題が起こる。そんな原因が自分の心に潜んでいないかを振り返ってみましょう。

【悪意】：他人や物事に対していなく悪い感情または見方。

この心から恨みやねたみ、敵意や不平不満などあらゆる悪へと広がっていく。→互いに愛し合うことはできなくなる

【ごまかし】：もっともらしく見せかけて他人をだますこと。本心を見破られないように、話をそらしたり、でまかせを言ったりして、その場やうわべをとりつくろ。釣り針にえきをつけるという言葉から来ている。釣り人がえきをつけて「おいしいよ」とだまして釣るように、他人をだますこと。最初のアダムとエバを蛇がだましたときの様子。

→自分の信用を失うだけではなく、相手との信頼関係を壊す。

【偽善】：本当の自分ではない自分を演じること。

自分の本当の感情とは違う言葉や態度で関わる。

→人との間に壁ができ、本当の親しい人間関係は作れなくなる。

【ねたみ】：相手が成功したり祝福されているのを見てうらやんだり、苦い思いをもつこと。嫉妬。

キリストの弟子たちも、この中で誰が一番えらいかと議論していた。

→互いに愛し合うことを妨げ、良い人間関係を壊す。

【悪口】：誰かのことを引き下げて話すこと、事実ではないことを根拠にした悪口を言いふらして、他人を傷つける行為。

誰かが良いように言われていると「でも、あの人はこういうところがあるんだよ。本当はこうなんだよ」や「あの人のこういうところ困っている」と、一見良くしたいように見えて、その人をどうにか引き下げようとする思いで話す。大抵の場合、心の中のねたみが原因となる。

→問題を引き起こし、兄弟愛や一致を破壊する。

私たちは、御言葉の乳を慕い求める前に捨てるものがあるとされました。すべての悪意、すべての偽り、偽善やねたみ、すべての悪口でこれらのふさわしくないものを汚れた服を脱ぐように私達は脱ぎ捨てる必要があります。

「聖なる方」にならうとは？

[ペテロの手紙 第一 1:15,16]『むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。「あなたがたは聖なる者でなければならない。わたしが聖だからである」と書いてあるからです。』

この「あなたがたは聖なる者でなければならない。…」という箇所はレビ記からの引用です。レビ 19:2『イスラエル人の全会衆に告げて言え。あなたがたの神、【主】であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。』モーセは祭司と呼ばれていないが当時、一般的には、聖所が設立され、そこにおいて中心的な奉仕をする職務を与えられた者が祭司と呼ばれました。祭司は、神にささげられるものが、律法にかなっているかどうかを常に注意深く見守っていなければならない。また、すべてのことが規定通りに行われるように熟練しなければならない。荒野で宿営する時、イスラエルの各部族は、幕屋を中心にして、これを取り巻くように陣営を張ったが、幕屋の入口、つまり東側に近く宿営するのはモーセと祭司たちに限られ、それ以外の者が近づくことは許されませんでした(民 3:38)。新約の時代ではクリスチャはすべて祭司なのである(エペ 2:19, I ペテ 2:5, 9, 黙 1:5-6, 参照ロマ 12:1), と語られています。だから、神様が私達の為に「聖なるもの」となって下さり、神様に特別に属する祭司としてこの御言葉を聴く必要があります。「聖なる」と聞くと「完璧な」「罪がない」などのイメージを持っておられる方もおられるかもしれませんが、聖書で大切にされたいる意味は「特別な、特殊な、他と違う、献呈された、献納された、捧げられた、費やされた」といった意味です。つまり、私達はイエスの十字架により特別に取り分けられた存在なのです。

その事を「摘要、摘用、摘応」という言葉の順にみて行きましょう。

①摘要しよう(要点を抜き出す)

神様がまず私たちの特別な存在となってくれたということ。

そして私たちがイエス様の十字架の贖いによって取り分けられたということですからこれは私たちの能力や現状や環境などは一切関係ありません。

そしてその神様の存在は変わりません。

②摘用しよう(要点を当てはめる)

自分に当てはまることだけをしようとするなら私たちは本当の梁には気づけません。神様がせよと言われたことすべてを当てはめて自分を神様の側に移動させる必要があります。

③摘応しよう(要点が当てはまる)

神様側に立ってやっていくならこの摘応は自然になっていくのです。摘用(要点を当てはめる)事をしないでこの摘応をしてしまうと自分の都合の好い所だけを選んでいく結果になってしまいます。だから、自分で頑張って苦しくてもうできないもう無理。私は元から駄目だとなってしまいます。「従う」「敬う」「愛する」「尊ぶ」これらを全て自分に当てはめ(適用)実践していく時に「私達と私達の生き方に適応されて行きます。だからこそ「悪意」「ごまかし」「偽善」「ねたみ」「悪口」私たちのうちにあるこれらのものを脱ぎ捨てて行きましょう。

さいごに

私たちのためにイエス様がまずご自分を聖別してくださって、あがなひの神の子羊となって十字架に命を捨ててくださった。それに応じて、私たちもまた自分を主の側に立つ者として「私は特別に取り分けられた主のもの」と決断する。これは自覚してやらなければなりません。「いまここに主が置いてくださっておられる」と神様に私達の視点を戻すときに、そこに神様が働いて下さいます

(要約者: 泉水 浩)

(2021年5月9日)